

## 量が質を変える

かつての大量消費時代の粗製乱造に苦言を呈して量より質と言ったが、現代では、その量が質を変えている。これは、AI人工知能のことを指している。このことを論じる前に、まずAIに対する世間での勘違いを指摘しておこう。

最近では、何にでも安易にAIという言葉をつけているように思える。コンピュータシステムは自動計算が仕事であるから、人を介せずにも多くの結果を出してくれる。簡単な自動計算が入った商品までもが、AIという表示をつけて販売されている。また、専門家の解説にさえ、エキスパートシステムとAIの区別が付いてないものがある。エキスパートシステムとは、医師などの専門家や職人の方たちのノウハウをデータベース化し、コンピュータに彼らと同じように診断、意思決定したり、技術を再利用しいうとするものである。これに対し、人工知能とは、予めデータの範囲を決めずに、膨大なデータの中から有用なデータをマイニングし、統計処理あるいは何らかのモデリングやアルゴリズムを選択して意思判断を提供してくれるものである。要は、統計処理と数理科学のモデリングがベースになる技術である。自然言語での自動翻訳などにもAIが利用されてきている。つい最近まで、人間が創ったコンピュータシステムは人間の思考創造性を超えることはできないと断言する専門家が少なくなかった。ラッセルのラドックスからそういうことになる。しかし、これは当てはまらないだろう。その理由は、最初の誤解と同じである。

さて、最初に戻って、一部専門家の間違いを指摘する。あるとき、気象学の講演会でビッグデータの話が出た。気象予報では、当初から膨大な観測データを扱い、地球規模の数値計算をしているというのだ。まさにビッグデータというわけである。また、ある研究者は、予報精度をあげるにはメッシュの間隔を小さくすればするほど向上するのだから、より計算速度の速いコンピュータが必要だという。当然、より大きなコンピュータ予算を要求してくることになる。それはそれとして、ビッグデータという言葉の意味を勘違いしていることを指摘したい。ビッグデータとは不特定のデータという意味がある。いくらデータ量が多いからといって、ビッグデータとはいわない。ある一部の専門家は、ビッグデータには有用でないデータが殆どだという。コンピュータで処理するには不向きであり、予め有用なデータをビッグデータとして集める必要があると。彼らはビッグデータの意味を理解していない。

ビッグデータのポイントは、インターネット時代が成熟したからこそといえる。インターネットの利用者が増え始めた20年前に、「ありとあらゆるデータが、生活の中で、社会活動の中で、データの所有者に無断で無作為に集められていく」と予測された。その通りであって、ビッグデータの中から有用なデータをマイニングしていく技術が、まず、高度化された。その上で、数理科学としての統計処理が、人間の理解を超える知見を与えてくれている。まさに、量が質を変えてきているということだ。 (くさふさせいじろう C. Kycафyca)